俵に百五十兩ほど、錢百文に白米四合より貳合五勺迄に至りしかば、下賤の者難儀いふばかりなし、火附盗賊多くして、同八年正月廿八日の夜は、江戸中に火災九ケ所ほど有て、日々物さわがしく、其うへ大疫流行して人多く死す、飢にくるしみ道路にたほれ死す者、昨日はこゝ、今日はかしこ、幾人といふ數を知す、

〔天保集成絲綸錄百六〕天保八丙年四月

大目付江

時疫流行候節、此藥を用て其煩をのがるべし、

一時役には大つぶなる黑大豆をよくいりて、壹合甘草壹匁水に而せんじ出し、時々呑てよし、右醫渥ニ出ル、

一時疫には茗荷の根と葉をつきくだき、汁をとり多呑てよし、右肘後備急方ニ出ル、

一時疫には午房をつきくだき、汁を玄ぼり、茶碗半分宛二度飲て、其上桑の葉を一握ほど火にてよくあぶり、きいろになりたる時、茶碗に水四盃入二盃にせんじて、一度飲て汗をかきてよし、若シ桑の葉なくば枝に而もよし、右孫壹人食忌ニ出ル、

一時疫に而熱殊之外つよく、きちがいのごとくさわぎてくるしむには、芭蕉の根をつきくだき、汁を玄ぼりて飲てよし、右肘後備急方ニ出ル、

一切の食物毒にあたり、又いろ〳〵の草木、きのこ、魚、鳥、獸など喰煩に用ひて其死をのがるべし、

一一切の食物の毒にあたりくるしむには、いりたる鹽をなめ、又はぬるき湯にかきたて飲てよし、

但草木の葉を喰て毒にあたりたるには、いよ〳〵よし、右農政全書ニ出ル、